

地域会場 大田 東京都消費者月間イン大田

★「くらしと文学と自然保護」

- ・日 時：平成25年11月18日（月）13：30～16：00
- ・場 所：大田区立消費者生活センター 2階大集会室
- ・講 師：加藤 幸子さん（作家、1983年『夢の壁』で第88回芥川賞受賞、大田区在住）
- ・共 催：大田区
- ・参加人数：58人

<プログラム>

- 13：30 開会挨拶 東京都消費者月間実行委員会委員長 笹浪 真智子
大田区立消費者生活センター所長 新屋 敬子
- 13：45 講演
- 14：45 休憩
- 15：00 質問に答えて
- 16：00 閉会

山装い、自然界の美しさに心が和む一日、大田区在住、芥川賞作家加藤幸子さんを講師としてお招きし、東京港野鳥公園設立に至る活動の経緯や文学についてお話しいただきました。



加藤幸子さん画像

1、昔の大田区

◆昔の大田区の自然

私は1967年から大田区上池台に住んでいて、大田区を大変気に入っています。50年近く前のある時、大好きな野鳥のコジュケイに林の中で出会いました。コジュケイは「チョットコイ」と鳴きます。大田区のイメージは町工場が多いという感じだったので、東京都の中に野鳥のコジュケイがいることに驚き、すっかり魅了され、大田区に住むようになりました。

昔は野原や空き地が沢山あって、湿地になっていました。そこにザリガニや水中昆虫がいて、大東園の林があり、笹が下草として生い茂っていました。遊園地とか児童公園ではなくて、町の中に自然がありそこで子供たちが遊びました。今は整備され面影がなくなりましたが、絵のようにいい思い出として刻まれています。

2、自然保護活動と文学

◆自然保護活動のきっかけ

昔の大田区は田園っぽくて、所々に個人の畑があり、とてもどかでしたが、1970年代から80年代になって、町が近代化されてきました。近代化とはコンクリートで町全体が覆われることで、どぶが排水路となり路地（土の道）が舗装化され、雨の日もどろどろでなくなり、便利で清潔になりました。

皆さんは、大田区の中でモグラに会ったことがありますか？自家菜園で野菜を作っていたとき、モグラのトンネルを見つけましたが、モグラは見たことがありませんでした。しかし、木の階段からコンクリートの階段

に代わったとき、階段下の未舗装のところでモグラの死骸を見つけました。すごく可愛くて抱き上げましたが死んでいました。コンクリートを張られてしまったので必死で土のあるところに出てきて力尽きてしまったのではないかと思いました。

この時、人の生活が便利になるのは文明化することでよいことかもしれませんが、野生にとっては滅亡を意味し、悲劇ではないか、と気づきました。

◆自然環境保護の気持ち

それまでの自然と生き物が大好きというだけの女性から、少し変わってきて、身近な自然環境保護の気持ちが生まれてきました。

これからの時代を作る子供たちや若い人たちに、先ず、身近な自然と親しんでほしい、自然を好きになってもらうことが大事ではないか、自然が好きになれば自然を守ろうとしてくれるだろう、その上で都市の生活を築いて行ってほしいと思うようになりました。

◆若い人たち、子供たちと自然

その頃執筆活動を始めたばかりでしたが、物書きであると同時に生き物好きなので、手抜きしたくなくて、「小池しぜんの子」（「小池」とは上池台にある小さな池）という親子の自然観察会を作り代表となりました。たまたま早稲田の学生さんたちが子供たちを引率するリーダーを引き受けてくれました。

第1回目は1974年2月に多摩川の是政橋で水鳥観察会を開きました。望遠鏡を使って鳥たちを見ると普段とは違う世界を発見したような気になり、それ以降参加者がどんどん増えました。

夏休みには奥秩父で空き家を借りて、子供たちと合宿をしました。お化けが出そうな空き家でしたが子供たちには大うけでした。中にはサルに睨まれたとか正面から蛇に出会ったとかいう子供がいて、天井裏に住んでいた大ムカデが天井から落ちてきたこともありました。それまでは蜂を見ただけでキャーといっていた子供が、「蜂に刺された」と泣かないで言ってきて、その後も怖がらずに合宿に参加してきました。

「危険は自然のうちである」と知るには自然の中に入らないと分かりません。危険を知るためにも自然の中に入ることは大切だと思います。

◆自然を文学のテーマとして

この村と子供たちをモデルとして『野餓鬼のいた村』を書きました。「野餓鬼（のがき）」は私の造語ですが、主人公が子供で自然を文学のテーマとして取り入れた最初の作品です。1982年第14回新潮新人賞を受賞しました。この作品は私の物書きとしての出発点で気に入っています。

◆「大田区の尾瀬」を発見

1975年2月、大田区の埋め立て地「大井埋立地」に渡り鳥が沢山集まっているというニュースを聞きました。鳥たちが干潟に集まってくる、大田区に海があったのだということを忘れていたことに気づきました。埋め立て地という怖い、危険というイメージがあったので、親の会員たちだけで見に行きました。

そこは、放置された埋め立て地でしたが、昔埋め立てたところはすでに草原となり、自然が蘇り、自然の復元力を感じました。さらに海に近づくると葦原となり、その真ん中に雨水が溜まって大きな池ができていました。池には沢山のカモやカモメが泳いでいて、もっと海に近づくると干潟が自然に復活して出来ていて、沢山のカニの巣穴もあり、チドリ、シギなどの鳥もいました。こんなに近くに豊かな生き物たちの楽園があることを知り、ここを「大田区の尾瀬」と名づけました。

◆東京都と大田区に保存を要請

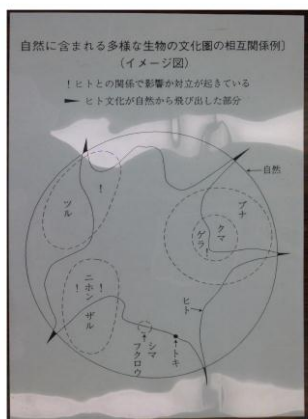
このように、一度埋め立てで壊れた海の風景がまた復元するのはめったにないことなので、何とか残してほしいと思いました。地主である東京都と地元である大田区に、ここの保存を要請しました。しかし、ここは市場（注 東京都中央卸売市場 大田市場）を建設する計画となっていて、役所が練った計画を変えた前例は無いといわれました。今まで市民活動をしたことが無かったのですが、それでもめげずに、当初3,000人の署名を集めて議会に提出し、野鳥公園、自然公園の形で残してほしいと運動しました。やがて14団体で「自然公園推進協議会」を作り、この運動がマスコミで取り上げられて、14年後、50haという相当な広さの半分が自然公園、半分を市場にすることに折り合いが付きまして。やっと、1989年に「東京港野鳥公園」として開園しました。今は野鳥の生息地と同時に気持ちのよい散策場になっています。

◆文学と野鳥公園保護活動との両立

自分の仕事が忙しい中、なぜ市民活動をしてきたのか。私は生き物たちとの触れ合いの小説を書いています。結果論として市民活動は仕事の上でも役に立っています。

自然と共存することが、どんなに人間を幸せにし生活を豊かにしてくれるか。この趣旨を東京都や大田区が理解してくれて、私は政治に疎いのですが、共鳴してくれた職員が手続き方法等を教えてくれました。人間を描くのが小説家の本筋なので、役人という普段なら接触の無い人たちを知ることも出来ました。

3、自然についてのイメージ図



OHP画像

◆手作りのOHPを使って

自然についての自分の考え方を図にしました。「自然に含まれる多様な生物の文化圏の相互関係例」の図です。生き物と人間の間をイメージしたもので、10年前に作りましたが今でも通用すると思います。動物にはそれぞれ固有の文化があると考えています。外側の大きな円が自然（地球）で、ヒトデのような形の部分がヒト文化圏です。クマゲラは絶滅種なので、この小さな円です。サルはヒトの文化圏に半分くらい入り込んで、人間と競合しています。かぶさっているところは競合しているところです。

地球からはみ出た部分があるのはヒト文化圏だけです。自然から飛び出た棘のような部分は自然を打ち壊す科学技術です。たとえば遺伝子組み換え操作や原発です。技術は円の中で収束すべきだと思いますが、ヒトの自然という文化を飛び出す科学技術や文明、こういう操作に根本的には賛成はできませんが、世界は進歩してそれが主流になっていくのかなと思います。しかし、飛び出す部分が増えるほど地球は確実に傷ついていきます。地球は地球としての生き物の文化の中に留めるべきだと思います。

◎会場からの質問に答えていただきました。いくつかご紹介します。



大田全体画像

Q1：海外の、特に中国の自然破壊についてどう思いますか？

A：子供の頃からの環境教育が必要ではないかと思います。野鳥などの自然観察をさせると興味が沸くので

は？お仕着せでない従来と違う、中国的な環境教育の仕組みを考えて、一緒に楽しめたらいいと思います。

Q2：大田区の空き地の利用方法は？

A：子供を大事にする仕方が昔と違います。子供は自然の中で育つべきで、空き地公園があるといいと思います。素材だけ与えていかに想像して遊ぶか、想像力・創造力を掻き立てる児童公園が今はないです。

Q3：コンクリートの建物についてどう思いますか？

A：素朴なコンクリートの建物は好みです。コンクリートがすべて悪いわけではありませんが、すべてを舗装化するのは地面が無くなることで、地球は土で出来ているということを小さい時から認識させたほうがよいと思います。

Q4：誰でも使える公園と自然を壊さない公園は両立しますか？

A：スロープを作って車椅子の方も利用できるようにするなど、工夫して設計すれば出来るのではないかとします。

Q5：作家活動について

A：辛いこと、苦しい時のほうがずっと多いです。でも活字になり読んでくださる方が少数でもいると分かった時は、とても嬉しいです。だから書き続けています。

日本では自分を中心にして行動などを書く「私小説」というジャンルがありますが、私は、他の生物の私小説を書こうと思っています。誰もやったことがありません。童話ではなくて、大人向けの小説です。他の生き物のリアリズムについて描こうと思っています。変わった作品だと思いますが、半年後には出来ていると思います。

◎参加者からの声

*自然を守ることの難しさと喜びを感じました。

*加藤さんの行動の実直さが小説にも現れている様に思われます。

*子供を連れて野鳥公園に何度も遊びに行ったことがありますが、何かとご尽力いただいた方とは知りませんでした。エピソードが聞けて参考になりました。

*さりげない口調の中に人間にとっての自然の大切さを問いかけていて、素晴らしいお話でした。

参加者には大田区在住の方が多かったので、身近な地元のお話として、大変興味深くお聞きいただきました。野鳥公園の自然の風景が目に浮かんでくるようなお話しぶりでした。